

【注】

(1) 筆者が大学および大学院でともに学んだ静岡大学情報学部の許山秀樹氏の御教示によれば、蝙蝠が陶器などでとりわけ紅色で画かれることが多いのは、「紅」の音が「洪(大きい、の意)」と同じであることによる、とのこと。つまり「紅蝙蝠」は「洪おおなる福」を意味するわけである。

(2) 静岡大学教育学部生物学教室の伊藤富夫氏から、唐・段公路の『北戸録』に、紅蝙蝠が出てきて、ほれ薬のように書かれている、との御教示を得た。そこで確認したところ、巻一「紅蝙蝠」に、以下のようにあった。

紅蝙蝠、出隴州。皆深紅色、唯翼脈淺黒。多雙伏紅蕉花間。採者若獲其一、則一不去。南人収爲媚藥。

《紅蝙蝠は、隴州に産出する。色はみな深紅だが、ただ翼の脈だけは浅黒い。紅蕉花の間につがい隠れていることが多い。捕獲の際に、もしその一方を捕まえると、もう一方は逃げようとしなない。南方の人々は、それを捕獲して媚薬としている。》

(3) 冒頭の四句に続き、五・六句目で蘇軾はさらに以下のように言う。

舊聞蜜啣嘗嘔吐 舊もと蜜啣みつしつを聞かつきて嘗
て嘔吐し
稍近蝦蟇縁習俗 稍やや蝦蟇がまに近づくは
習俗に縁ればなり

《以前に蜜啣という名の食べ物のことを聞いて嘔吐したことがあり、少しずつがま蝦蟇に慣れてきたのは、この土地の習俗に従って暮らしているからである。》

「蜜啣」は、鼠の胎児を蜜につけたもので、つまみ上げて口に入れ嚙むと「啣啣」と音がすることから、その名がある。鼠の薫製といい、蝙蝠の姿焼きといい、鼠の胎児の蜜漬けといい、蝦蟇といい、この時期の蘇軾の身の回りの蛋白源といえば、いわゆる下手物ばかりであったようだ。

辞書を使いこなせ！

名古屋語学教育研究室
服部 茂

皆さんは、辞書を使いこなしていますか。私の机上には、十数冊の英和、英英、その他英語関係の辞書が積んであります。英語の授業準備の大半を語彙の語法、用法の再確認に費やします。英語教師にとって辞書は不可欠です。たとえば、私にとって辞書は、ビート板といえます。このビート板をつかみながら英語という広い海を泳いでいるようなものです。荒波がきてもこのビート板を操ってうまく波をかわしていきます。そして、授業での私の役割はこのビート板をもちながら、英文という海で泳いでいる学生の皆さんに、時折、このビート板や浮き輪を投げ込むことです。

皆さんの英語学習と辞書使用歴は、ほぼ同じくらいだと思います。そして、辞書を使用するときは、主にテキストで分からない単語を中心に引いていることでしょう。英語の基礎をマスターしている人や辞書をうまく活用している人であればそれで十分です。もし、辞書を十分に使い切れないと感じるようであれば、しばらくの間、辞書を中心に据えた英語学習をすすめます。つまり、辞書を英語学習の最大のパートナーにすることを目指し、辞書を使いこなせるようにすることです。

辞書といい付き合いをすることで、英語学習をより効率的にしかもおもしろいものにしてくれます。皆さんもご存じのように、最近の辞書には語意のみならずさまざまな用法の違いや語源、単語のイメージから文化まで言及されています。辞書の範疇を超え、充実しています。ただ引いて終わ

りではあまりにももったいない限りです。辞書を英語学習の中心に据えて行うことは、ある程度時間がかかります。必ずしもインスタントな学習ではありません。しかし、辞書が良き相棒になると、辞書があれば一人で英語学習がすすめられるようになります。これが、辞書を使いこなすことを目指す最大の利点です。

辞書を引く際、名詞、形容詞、副詞はその語意決定には比較的苦労しないと思います。むしろ、形容詞、副詞では文中で置かれる基本的な位置、また、その他の位置の場合はどんな解釈が可能か、そして、どの品詞を修飾するかを調べるのが大切です。名詞は、その語源には興味深いところがあります。多くの場合、述語動詞（以下動詞と記述）の意味を調べることになるだろうと思います。動詞には、さまざまな組み合わせで多様な意味になります。英単語は、同じ綴りで複数の品詞をとるものもあります。その際、品詞の決定はその単語が置かれている位置で決まります。動詞は、名詞（主語）の隣りにきます。さらに、動詞の場合、自動詞、他動詞に分かれます。その動詞の後に来る語順（文型）で動詞の意味が決定されます。動詞は、数ある語意からの確にその英文にふさわしい意味を選ぶことがポイントになります。単語は、単独で意味は成しません。文の中に入って、もっといえばその文が使われている状況に即して意味を成します。普段、授業で予習の成果を求めて学生さんを指名する際、「単語は調べてあります」という場面に出くわします。しかし、単語は今述べた過程で意味を成しますので、英文の内容を把握する際、英文に出ている単語一つ一つ調べても勉強にはなりません。runを「走る」だけで終わってはいけません。文全体の中で特に動詞の場合は、その後にくる要素もあわせて考えなければなりません。辞書を惜しみなく引いて下さい。

動詞は、組み合わせ次第でさまざまな意味に成りえますのでその組み合わせにも自力で発見し、拾い上げなければなりません。たとえば、その動詞がとる文型、その場合の意味、あるいは、どんな前置詞をとるのが、目的語は不定詞か動名詞か、

that節なのかを確認する必要があります。目にしている英文と辞書を照らし合わせて辞書とじっくりと対話するのです。その過程の繰り返しは語感や推測力を高めたりするのだと思います。調べた単語の語法、用法はノートにまとめておくのも一案かと思います。ここでも、手間を惜しんではいけません。もちろん、いつもじっくりくる語訳があるとは限りません。その場合は、例文を使うと良いでしょう。例文をしっかり読み、その例文の状況、内容をよく吟味し未知なる単語の意味を浮き上がらせるのです。また、その際、英英辞典を使うとさらにはっきりします。英英辞典からその単語の意味の範疇が確定されます。

以上のように辞書を使いこなす上で、辞書を中心にして英語学習を試みることをおすすめします。それは、辞書で調べると同時に「読む」ということも意味します。未知なる単語はもちろん、知っている単語や動詞の基本語も改めて調べてみるのも良いでしょう。今まで知らなかった事柄に出くわすかもしれません。この再発見が側面から語彙の力をつけさせてくれます。辞書中心学習は、先にも述べましたが腰を据えて取り組む必要があります。それだけ、「一を聞いて十を知る」的な効果はあります。

この文章は、紙の辞書を使用することを前提に書いています。もちろん、電子辞書の活用も構いません。自宅では、紙の辞書を中心にして便宜的に電子辞書と並行して使うのが良いかと思います。実際、辞書は目的に応じて複数揃えておくことが望ましいです。ここでは、紙、電子両辞書のどちらが良いかということには触れませんが、ある程度、紙の辞書も手になじませておくことも必要だと思います。何度も使用していくうちに、より早く引けるようになりますし、引くことが億劫にもならなくなります。そのことが、電子辞書を使用するときにも役に立つと思います。いずれにせよ、調べる力は、学問の基礎にもなります。詳しい辞書案内や推薦図書は、2008年度「外国語ハンドブック（名古屋語学教育研究室発行）」を参照して下さい。また、LLニュース 36（豊橋語学教育研

究室発行)では「辞書活用法」の特集が組まれていますのでそちらもご覧下さい。

では、最後にこのエッセイの付録として課題を差し上げましょう。次の文章の下線部を辞書を用いて和訳して下さい。これは、Somerset Maugham (英国の劇作家)の *A Writer's Notebook* からの文章です。少し内容が難解な英文ではありますが、英文をみる目を養う練習になります。

Our conduct towards our fellow-men is determined by the principle of self-preservation. The individual acts towards his fellows in such and such a manner so as to obtain advantages which otherwise he could not get or to avoid evils which they might inflict upon him. He has no debt towards society; he acts in a certain way to receive benefits, society accepts his useful action and pays for it. Society rewards him for the good he does it and punishes him for the harm.

語研ニュース読者の学生さん中でこの和訳の添削を希望される方は、筆者のところまで持ってきて下さい。個人添削します。

ロンドンで世界一のミュージカル『レ・ミゼラブル』を楽しむ

経営学部

太田 幸治

ロンドンは、ミュージカルの街

『キャッツ』、『オペラ座の怪人』、『マンマ・ミーア』、『レ・ミゼラブル』。ミュージカルに興味がない人でも、これら作品タイトルのうち、1つか2つのタイトルくらいは聞いたことがあるだろう。これらのミュージカルには共通点がある。それは、これらはすべてロンドン産であるということ。

ミュージカルの街というと、ニューヨーク (=ブロードウェイ)を思い浮かべる人がほとんどではないだろうか。しかし、イギリスはロンドンのウエスト・エンドでもたくさんのミュージカルが製作、上演されており、ウエスト・エンドの劇場は、地元の演劇、ミュージカル・ファンばかりではなく、世界中のミュージカル・ファン、そしてロンドンを訪れる観光客でいつも賑わっている。ウエスト・エンドで上演される演劇は、台詞だけの劇=ストレート・プレイのみならず、ミュージカルにおいてもかなりハイ・クオリティのものが上演されている。それもそのはず、イギリスはシェイクスピアを生んだ国。もともと演劇への感度が高いのである。

このエッセイは、ミュージカル好きの筆者が、ミュージカル好きになった理由と、昨夏ロンドンで観た世界で最も長く上演され続けているミュージカル『レ・ミゼラブル』の感想を綴ったものである。